

5 歳児で育みたい幼児相互の人間関係

- 小学校授業につながる協同性に視点をあてて -

本山 ひふみ

Human relationships for five years old children in preschool education

- Teams up of preschoolers connect with elementary school lessons -

Hifumi MOTOYAMA

Preschool education for five years old children needs to see far ahead into elementary school education. This study considered the characteristics of child development, the actual practices in kindergartens or in nursery schools, the meetings with childcare persons and kindergarten teachers and elementary school teachers, and lessons in elementary school. It is necessary to bring up their children to be cooperative. Teams up of preschoolers connect with elementary school lessons.

I present a teaching plan for shaping children's relationships. It needs further consideration.

1 . 研究動機

2006 年の改正教育基本法の成立を受けて、このたび改定されて告示される「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」では、「幼児教育と小学校教育とのつながりをさらに明確にしていくこと」と「子育て支援、家庭との連携を強めていくこと」の二つが大きな課題となっている¹⁾。その前者「幼児教育と小学校教育とのつながり」を考えていく際には、5 歳児（年長児）の保育のあり方が重要になる。

わが国では相当前からほとんどの 5 歳児が幼稚園か保育所に行っており、就学前の教育の重要性が広く世間に認められてきている。しかし、その中身がいかにあるべきかについては、世間一般ではもちろんのこと、幼児教育者の中でも、さまざまな理解や考え方や保育のあり方が混在しているのが実情である。このことは、大別して幼稚園と保育所の 2 種の施設があること、さらにそれぞれに公立と私立があること、幼稚園では私立が圧倒的に多いことなどが、その後の義務教育の公立学校中心の有様とは異なっている点による。

筆者自身の幼稚園教育実践は、5 歳児の経験が多く、保育者養成校勤務に移ってからは、授

業の中だけでなく、保育者研修会において幼児後期の保育のあり方を問題にしてきた²⁾³⁾。近年は、地域の小学校の評議員としての経験や、学校支援ボランティア活動の実践も得、さらに愛知県東海市幼児教育研究協議会で保幼小連携の助言を行った。そこで、5歳児の保育の進め方や、小学校教育とのつながりについて考察し、5歳児段階で幼児相互に協同性を育むための指導試案を提示したいと考えた。

2．研究方法

幼児期とくに5歳児の人間関係について示された文献を用いて、その発達特性を確認する。また、文献に記された保育者の実践記録を読み取り、筆者自身の5歳児に対する教育実践を振り返り、5歳児の保育に当たって保育者が育むべき幼児相互の人間関係について考察する。さらに小学校教育に触れた経験から、幼児期の人間関係における育ちが小学校教育においてどのようなつながりを持つのかを検討する。最後に、5歳児に協同性を育むための指導試案を作成する。

3．研究内容

(1) 幼児期の人間関係発達から考えた小学校教育へのつながり

幼児期の教育とは、改定教育基本法に示されるように「生涯にわたる人間の生き方の基礎」であり、単に小学校教育の準備教育でなく、生涯にわたる成長や長期にわたる学校教育の一番の基礎となる全人教育である。決して小学校教育の内容の先取りや、形だけの小学校教室スタイルの真似事であってはならない。

集団の中での幼児の自発性、自己活動性は3歳前後から、集団との関係において発揮され方が異なっていく。幼児期の人間関係の発達に伴う遊び方の違いをまとめると次のようになる。

3歳頃からの平行(並行)遊び(他の幼児と類似した活動はするが、直接のかかわりはない)

情緒面で他の幼児と安定した関係に入るからこそ同じ行動をとり、同じ場を共有する

4歳頃からの連合(合同)遊び(他の幼児と一緒に同じような活動をする)

限定された1～2人との情緒を安定させるおしゃべりが活動と結びついて、ごっこ遊びへと発展する

5歳頃からの協同遊び(役割分担があり協力して遊ぶ、組織された遊び方)

誰とでも好きなときに目的に合わせてコミュニケーションを行う、みんなで相談して遊びを進める、共通のルールに従って遊びを楽しむ

初めての集団生活の場である保育所・幼稚園では、幼児が、保育者との信頼関係を基に築き始めた友達関係、そこからさらに広がった学級仲間との関係が、家庭から踏み出した社会の一員としての芽を育む。幼稚園教育要領⁴⁾には「自己発揮から自己抑制への流れ」を中心に伸ばすことの重要性が書かれている。具体的には、「協同的な学び」つまり、子どもたちが他の子どもと協力しながら何をやるかという目標を見つけて活動していくことで体得する「他者の存在

があったからこそ得られた自分の学び」である。誰かの思いつきに誰かが反応し、それが徐々に皆の共通の目標になっていく中で、また別の発想や工夫が引き出され、互いに影響を及ぼしあって、「このメンバーだからこそその経験」を保育者とともに幼児が体感していく。もちろんその過程において、自己を発揮するばかりでなく、時と場合に応じて自己抑制することも求められることになる。

このような学びを年長の後半あたりからできるように時間をかけていくと、これが小学校の授業の基礎につながると考えられている。保育者が、小学校教育をある程度見通しながら、今、園の活動にある芽生えを大事に育てていくことが、小学校との連携カリキュラム作成の基本となるであろう。

また、最近では、改訂作業中の小学校学習指導要領の「生活科」の中には、「幼児との交流活動を進める」という内容が取り入れられる動きがある¹⁾。ここで期待されることは、小学校の児童と保育所・幼稚園の幼児が交流することだけでなく、保育者と小学校教諭とが互いに理解しあって一緒に保育・授業を創っていくということが進んでいくことであろう。その前提として、保育者が、5歳児の人間関係の発達のあるり方と、それがどう小学校教育につながるのかを意識化することは重要である。

(2) 文献に見られる5歳児の保育実践

『現代と保育』63号⁵⁾には、「スーホの白い馬」の絵本を基にした劇づくりの実践研究と、「実物大のじんべいざめ」を描く実践研究が紹介されている。

「スーホの白い馬」では、5歳児が2学期に、絵本に表された絵や言葉をもとに、情景や心情を保育者と話し合う中で描いていく、絵を基にセリフを作っていく保育実践がなされ、それが劇づくりに結びついていく、その中での幼児の葛藤や保育者の思いが綴られている。取り組みの中で保育者は、馬頭琴のコンサートに行ったり、モンゴルの資料を手にしたりして、自身の引き出しを豊かにしようと努力し、また、音楽の得意な同僚の助けを得てオリジナルソングを完成させていく。

「実物大のじんべいざめ」では、1学期の魚釣りの絵をきっかけに、図鑑を見て様々な生き物を描き始め、じんべいざめの大きさをも表現した「博物館」を学級で開き、さらに2学期には、12メートルに及ぶ実物大のじんべいざめを学級全員の協力で描ききるまでの取り組みが報告されている。この中で保育者は、保育環境の中に図鑑を充実させたり、色鉛筆などの画材を研究したり、昆虫のカードゲームやブロックやアイロンビーズも幼児と共有していく。

これらの実践研究に対して対談や解説といった形で以下のような内容が記述されている。

- ・ 思考する言葉「内言」が飛躍的に育つ幼児後期では、絵を描く、描いた絵について伝え合うことが、書き言葉をまだ本格的に獲得していない段階の幼児のより自覚的・意図的な思考の手段となる。
- ・ 「対話」の体験を通して、人に「聞き取ってもらおう喜び」「伝える喜び」を幼児が十分に知

ることが、論理的思考の育ちを支え、書き言葉へのステップとなる。

- ・ 幼児後期では、人と比較する力、自分の力を客観的にとらえる力が獲得され、集団の中にあることが辛くなることがあるが、そのときこそ「安心して信頼できる関係づくり」が大切である。
- ・ 相手の思いに心を寄せる力を培って巣立つとき、新しく出会う仲間のよいところを見つけて友達関係を紡ぎ、楽しい学校生活を送る基盤を整えるであろう。

(3) 自身の保育実践を振り返って

次に、筆者自身の保育実践を振り返って、5歳児の人間関係の発達について時期を追って整理し、育みたい力について検討する。

保育現場にいた15年間のうち年長児を担当した7年から得た実態把握では、4歳児が5歳児になる時には、それまでの園生活を比較的鮮明に記憶しており、年長児に対して抱いてきた憧れを「年長としてこんなことをしてみたい」といった形で表してくる。

1) 1学期の頃

新しい保育室での遊びに少し慣れてくると、自分たちの遊びに下の学年の子どもたちを参加させたがる。担任した年度によって1～2ヶ月の違いはあるが、ある遊びのグループが下の学年を招きたいと言い出してくる。招くということは保育室に他のクラスの幼児がかなりの人数入り込むことになるので、担任としてはその発案を学級全員に伝え、了解をとる。すると、皆たいへん喜び、保育室の場の設定変更や装飾に協力的に参加する。また、その発案を聞いて別の遊びのグループの子どもたちが、それなら自分たちもこういう形で参加したいと言い出すこともある。実際に迎えるときには、招いた遊びのグループ以外の子どもが案内役を買って出たり、気づかって声をかけたりする姿が見られる。

具体的な活動で言うと、紙粘土のケーキ屋に招くのなら、おみやげに空き箱製作のおもちゃもあげたいとか、団子屋に招くなら暖簾があるといいと思って新聞紙を利用して家で作ってきたとか、OHPの映画館ごっこの観客にアイスクリーム屋ごっこの子がアイスを配り始めたとか、ペープサート劇場に招いた客の入りが気になって外遊びを中断しては何度も様子を見に来るとか、自分のロッカーに近寄るために招待客のそばでは腰をかがめて通る・・・といった、これまでの自分の遊びしか見えていない姿から、周りの友達の動きを視野に入れて自分の動きを決める姿へと成長を見せる。その証拠に、ある程度の期間、ひとつの遊びが継続し、少し下火になった頃に別の子どもが同様の遊びを始めることもこの頃にはよく見られるものである。

下の学年をお客として招くという発案は、自分たちのごっこ遊びも活気づく上、年長児としての誇らしい気持ちも満たしてくれる。そして、視野が広がってきている子どもたちは、他の子どもがしている遊びと交流したり経験したりしながら、互いの興味関心に影響を与え合う。1学期が終わる頃に担任は「今年のこのクラスは 遊びが好きだ」といった印象を抱く。

2) 2学期の頃

幼児は1学期の経験からすでに、互いの特徴や遊び方を認めつつあり、遊び仲間以外のクラスメイトにも関心を広め、あまり一緒に遊ばないクラスメイトの名前も把握している。そのため、普段の遊びの中でも、遊具の貸し借りを交渉するなど必要に応じて言葉を交わせるようになってくる。

2学期は、運動会に始まって、大きな行事が組まれる時期である。保育者にとっては、行事の派手さが負担となり、なぜ普段の保育を中断して行事を行うのかと疑問になる時もある。しかし、もし行事がなかったら、心ときめいたり、張り切ったりする機会の少ない、変化や潤いや季節感に乏しい園生活になってしまうであろう。5歳児は、去年の年長児がしたことを今度は自分がしたい、自分たちはこんなふうにしたいという思いもあたまにためている。保育者自身が行事を、させられていると思うのではなく、幼児に実り多き数々の経験をもたらす機会ととらえ、行事を活用して学級に共通の目標を見出し、子どもたち一人ひとりの持てる力をつなげていこうとする姿勢が大切だと考える。

具体的には、テレビアニメや絵本や劇の観賞で親しみを持った題材を基に、園での自分たちの遊びを時間をかけて作り出すことに意欲的な姿が多く見られる。好きな番組の主題歌に乗せて踊り作りに取り組み様々な動きを提案するとか、絵本の登場人物になりきろうとお面やマントなど身につけるものを工夫して作ったり基地となる場所を積み木で構成したり、さらにその場で扱うおもちゃを手作りするとか、カスタネットの様々な打ち方に挑戦したり色々な打楽器の打ち方を試したりするとか、音楽劇観賞で見聞きした歌や踊りを再現して遊ぶとか、遠足の経験画から紙芝居作りに発展するなど、今日すぐには完結せず、継続的な活動を保証することで始めて可能になる遊び方を楽しむようになる。

保育者は、幼児の興味関心に基づいた素材や共有できるイメージを提供したり、幼児の思いを実現できる環境構成や援助活動をしたりする。と同時に、運動会や誕生会など行事の機会を、幼児が創り出す活動の発表の場ととらえ、適時に活用することで、発表という学級の共通目標に向けてそれぞれが取り組む中で、5歳児として自信を持てるようにすることも大切である。

3) 3学期の頃

3学期は、ひとつには、2学期までの園生活で、学級の幼児と保育者とで創り出してきた遊びの数々を「生活発表会」という形で総まとめをしていく時期である。生活発表会という大きな目標のために、どのような構成にすれば保護者にも他学級の幼児にも理解されるものになるのか、保育者の見通しに負うところも大きい。また、幼児一人ひとりも責任を自覚し、苦手な面では苦しむことも出てくる。そのような時にこそ、保育者との信頼関係、幼児相互の他者理解がどの程度根付いているかが問われる。互いが認め合い、助け合えるあたたかい人間関係が育っていれば、困難を乗り越え、より強い結びつきや高い充実感を得ることにつながる。

具体的には、むずかしくてできない製作や動きや役回りを周りから求められて悩む、一緒に

やりたいのに気持ちが揃わず中断するといった場面であるが、それを素直に表出でき、他者の力添えを求め、協力が得られるよう、この時期ではもはや保育者が出ることよりも、引くことで幼児相互の人間関係を確かなものにしていくことが重要である。

もうひとつには、そこで得られた経験を次の新しい歩み出しへの確かな力とする時期である。これまで遊びの中では保育者がグループ内の意見の引き出しや調整を行ってきたが、学級全員で保育者を中心にひとつの問題について考えたり意見を出し合ったりする中で、他者の意見を聞く経験、考えたことを言葉にする経験、対話を通して考えを深めていく経験が必要になってくる。たとえば「滑り台の逆さ登り」は何故いけないのか、何故挑戦したいのか、どのような条件下でなら可能なのかといった問題を掘り下げていくことも、これからの生活に反映させることのできる重要な問題である。もちろん、就学への不安を解消すべく小学校への授業見学や、区切りを付けた時間の過ごし方も有効である。

(4) 愛知県東海市幼児教育研究協議会における5歳児公開保育と研究協議

筆者は6年前から愛知県東海市での保育士研修会講師を担当しており、今年度は同市幼児教育研究協議会による公開保育の助言の依頼も受けた。東海市は、公立保育所が幼児教育の主体を担ってきたが、幼稚園もでき始め、保育所と幼稚園の連携をめざして、昭和49年に幼児教育研究協議会が立ち上がった。活動を継続するうち、小学校教育との連続性が問われ、ちょうど小学校に生活科が開設される機会に小学校教諭も交えて、保幼小の連携を図る研究協議会となった。そのため5歳児の保育に主眼を置いているので、紹介して参考にしたい。

1) 公開保育の運営

公開保育は、市を南北のブロックに分け、両地区で年1回開催され、開催園は持ち回りである。ブロック内の各園から代表の保育者が参加するだけでなく、子育て支援課から統括主幹や指導保育士、小学校から校長や教務主任、地域の幼児教育指導員や主任児童委員が参集する。

公開園では年長児クラスの午前の1時間弱の保育が公開され、その後、公開保育担当者も交えて夕方まで研究協議を行う。

2) 公開保育の実施

園長より沿革、今年度の努力目標が紹介された後、助言者として筆者が本日の観点を提示することになった。保育者の計画の良し悪しや、援助の仕方に着目するより、指導案の中に示された子どもの姿を、参観者の目と耳で確認すること、さらに保育者が気付かない内在する問題はないかを子どもの表情や雰囲気から読み取ること等を観点として提示した。

3) 保育者の反省とグループ討議、討議内容の発表

見聞した子どもの姿から、ねらいや内容の検討、それを具現化する環境構成の見直しを観点として提示した上で、各グループに分かれて討議。後に発表。

4) 講話

前半では、子どもの姿からねらいや内容を見直していく具体案を示し、本日の保育環境を再

構成できる可能性について話した。後半は、就学前幼児の集団づくりの意義とその進め方について話し、公開された保育と討議内容の発表を踏まえて、今後の保育の見通しを示唆した。

5) 所感

公開保育後、時間をかけて行われた研究討議では、各園から参加している保育者だけでなく、小学校校長や教務主任、元校長の幼児教育指導員の先生方もが、幼児の実態を受容され、心情を共感的に捉えておられ、さらに保育者の不断の努力を認めていた。この協議会では、公開保育以外の活動として、小学校教諭が保育所で一日実習を行ったり、逆に、保育者が小学校で1時間授業を担当したりする取り組みもなされているとのことであり、保育者と小学校教諭の互いの理解は、年月をかけ、互いの場を交換し合って体験的に得られたものであった。

(5) 小学校教育に引き継ぐ幼児の力

ここ数年、各地で小学校における「学校支援ボランティア」の活動が盛んになってきている。これは、通常の学校生活の中にも地域の高齢者や母親らの力を生かして、たとえば登下校時の安全を確保したり、昼休みに読み聞かせを行ったり、グループで行う調べ学習の引率をしたりして、子どもたちをいろいろな角度から見て伸ばしていこう、地域の教育力を活用しようとするものである。筆者自身こういった活動に参加する中で、小学校の教師と児童とで織り成す学校生活に触れる機会が増えてきた。また、今年度から委嘱を受けた小学校評議員の活動では、各学年の授業風景を参観したり管理職との意見交換をしたりする機会もあった。

小学校の授業の中で大切にされているのは、教師からの知識の伝播だけではなく、目の前にある問題をどんな方法で解決できるのかを、教師やクラスメイトと一緒に考えていく授業作りである。そのためには、自分の思いを素直に表現できる仲間関係、仲間の意見に耳を傾ける姿勢、その前提として、確かに受け止める教師の存在が必要となる。

保育所や幼稚園は初めての集団生活の場であり、「先生」や「クラスメイト」の概念を築く時期にあたる。その概念形成は、あたかも、生後約半年かかっておこなうアタッチメントの形成にあたって愛着対象となる母親が、今後出会う「人類の代表」であるかのようである。保育者への親しみの気持ちを基盤に、同じ遊びを好む子ども同士が親しくなり、意思の疎通が困難な場面では保育者の代弁や仲介を得て自己表現の方法を次第に身につけ、友達の思いを受け止められるようになり、友達が増え、さらに遊び仲間以外ともかかわれるようになり、クラスの目標に向かって力を合わせていくことができるようになる。これには最低でも1年の時間が必要となるが、ここで培った保育者への信頼感やクラスメイトとの協同性は、今後出会う「先生」や「クラスメイト」とも、きっと同じような関係を築くことができると確信する原動力となる。それに見合う「先生」像、「クラスメイト」像を構築することが、初めての集団生活に求められている。ただ違いは、そのような人間関係の構築を、保育所や幼稚園は「遊び」を通して行い、小学校では「学習活動」を通して行うと考えることができよう。

「遊び」を通して協同性を育てる視点として、国立教育政策研究所教育課程研究センター⁶⁾

では、次の6点を示している。

- ・ 幼児同士の交流が自然に生まれてくる環境を構成する
- ・ 少人数での活動を大切にする
- ・ 学級全体で活動する
- ・ こだわりを追求し、知的な広がりのある協同的な活動を行う
- ・ 学び合いや話し合いを援助する
- ・ 異年齢との学び合い

(6) 5歳児指導試案

以上の(1)～(5)に掲げた内容を基に、5歳児において協同性を育み、小学校教育につなげる力を養う指導試案を以下のように作成した。

一学期「友達とさまざまな遊びに取り組む中で、学級の仲間を意識する時期」

- <環境構成> ・ 友達同士が安心して継続的に活動できるよう、時間や空間を確保する
- ・ 幼児の発想が実現できるよう、さまざまな素材を取り込む

- <援助活動> ・ 一人ひとりの特性に応じて受容して援助したり心の絆を結んだりする
- ・ 幼児相互が遊びに関心を持ったり参加したりするきっかけを大切にする

二学期「遊びの中でテーマを見つけ、一つの目標に向かって協力し実現しようとする時期」

- <環境構成> ・ 学級の共通テーマとなりうる題材を見つけて関連分野の充実を図る
- ・ 行事の機会を意識して活用する。(誕生会、運動会、作品展、発表会など)

- <援助活動> ・ 幼児の興味関心に基づいた素材や共有できるイメージを提供する
- ・ 個々の持ち味を發揮し伝え合う中で、考える力をつなぎ合わせていく

三学期「園生活で得た手ごたえを、新しい生活への期待につなげていく時期」

- <環境構成> ・ 共通の目的を達成する喜びが体験できるよう発表のための構成を工夫する
- ・ 対話を通して内言を豊かに育み、問題を解決できる力を培う

- <援助活動> ・ 幼児ごとの課題に対して温かく支え、他者と補い合う喜びにつなげる
- ・ 就学を視野に入れ保育者は徐々に引き、巣立ちへの自信を感じさせていく

4. まとめ

保育所、幼稚園における5歳児の保育は、次に来る小学校教育とのつながりを考えていく必要がある。まず、幼児期の人間関係発達から幼児後期の発達特性をとらえ、次に保育実践から幼児の育ちや保育者のかかわりを検討した。その上で、保育所・幼稚園・小学校の合同研究協議会の活動や、小学校の授業の様子から、5歳児で育てたい人間関係「協同性」について、その意義を考えていった。

それらを基に、指導試案を作成し、学期ごとの大まかな育ちやそれを支える環境構成と保育者の援助活動を提案した。

今後は、指導試案の有用性を、保育実践者とともに検証していきたい。

参考文献・参考資料

- 1)無藤隆,(2007)：講演「これからの保育を創る」, 富山短期大学幼児教育センター,越の子 56
- 2)本山ひふみ,(2006)：幼児教育への理解を深める保育者研修のあり方,鈴鹿国際大学短期大学部紀要第26巻
- 3)本山ひふみ,(2007)：幼児後期の「教育」機能充実につながる保育者研修,鈴鹿短期大学紀要第27巻
- 4)文部省,(1999)：幼稚園教育要領
- 5)松井玲子,(2005)：5歳児の保育を考える,現代と保育63号,ひとなる書房
- 6)国立教育政策研究所教育課程研究センター,(2005)：幼児期から児童期への教育,ひかりのくに